

私の一冊

社会福祉学科 奥田 都子 先生

六車 由実 著 『介護民俗学へようこそ！「すまいるほ一む」の物語』

小鹿図書館 369.2604 || Mu 19

本書は、前著『驚きの介護民俗学』(医学書院)に続き、民俗学の手法による介護現場での「聞き書き」を提唱するとともに、著者が管理者として勤務する小規模デイサービス「すまいるほ一む」で繰り広げられる対話から、利用者の人生にどのように寄り添うかを示す良書である。施設の日常生活で、何かの拍子に語りだされる鮮やかな記憶の数々や多彩な物語に湧きおこる笑いと涙。認知症の利用者もスタッフも生き生きとした感情を取り戻していく聞き書きの力に読者は思わず引き込まれてしまう。現在の介護のあり方への問題意識も織り交ぜながら、介護民俗学という方法で介護の未来を切り拓く意欲的な取り組みである。

著者は民俗学を専攻する大学教員から、介護の現場に転身した異色の経歴をもつがゆえに、高齢者介護の現場が思いがけず「民俗学の宝庫」であると気づき、聞き書きを重ねるうちに、高齢者と介護スタッフとの関係性に疑問を抱く。というのも、民俗学における聞き書きでは、高齢者が記憶をたどりながら語る経験に価値があり、「語り手」である高齢者は教える立場として尊重され、教えられる側の聞き手よりも圧倒的な優位に立つからである。

しかし、介護の現場では、介護スタッフは「介護する側」、高齢者は「介護される側」に関係が固定化され、介護スタッフの目に映る利用者は援助の対象でしかなくなってしまう。ところが、利用者への聞き書きを行うことによって、それまでの見え方が変わってくる。一時的にでも利用者との関係性の逆転を起こすことによって関係性の変化に繋がり、それぞれの人生を歩んできた一人の人間として向き合えるようになるという。そんなマジックがどのように起きるのか、本書でお確かめいただきたい。

著者も指摘するように、介護現場のスタッフの多くは、利用者がどんな人生を歩んできたのかについて、ほとんど知らない(あるいは知らされない)という残念な現実がある。生活歴と称するわずかな記述から、利用者の人生に寄り添う介護を提供するにはあまりにも情報が少ない。そう感じて、私の授業では20年来、聞き書きを必修課題に位置づけてきたが、本書はまさに聞き書きの有用性に確信を与えてくれた。介護現場において「利用者個人の生き方を尊重する介護」を実現したいと思う方、自分の生き方を尊重される介護を受けたいと思う方々に、ぜひ本書のご一読をお勧めする。